

ヲ之モ余リ用ヒラレヌ此出テ來タノガ今日吾々ガ用ヒテ居ル「タングステン」電燈アル之ハ云フ迄モナク「タングステン」ト云フ金屬ノ細キ針金ヲ用ヒタモノテ是ハ熔解ノ温度ハ三千三百四十度デ白金ノ殆ソド倍高イ且ツ出ス光ノ色モ余程太陽ノ光ノ色ニ似テ居テ心持ガ非常ニ良イソレシテ高温ニ熱スルコトガ出來ルカラ電力ガ少クテ明ルイ光ヲ出ス即チ炭素線ノ電燈ノ約三分ノ一ノ電力ヲヨイソレダカラ同ク電力炭素線電燈ノ數ノ三倍ノ電燈ガ点火ル譯テ非常ニ經濟ナル併シ此電燈モ矢張高温ニ熱スルト「タングステン」ノ粉ガ飛ンテ針金ハ次第ニ細クナリ遂ニ切レ硝子ハ段々薄黒クナルハ免レヌ即チ此電燈ノ使ヘナクナル迄又使ヘタ所テ非常ニ暗クテ仕方ガナイ様ニナル迄ノ時間即チ此電燈ノ壽命ハ約七八百時間アル而シテ此壽命ハ前ニ述ヘタ様ニ電力ヲ經濟的ニ使フタメ温度ヲ高クスレバスル程短クナルカラ是モムヤミニ温度ヲ高メルト云フコトハ出來ヌソコデ此「タングステン」チ尙一層温度ヲ高メテ電力ヲ經濟的ニシ電燈チ明ルクシテモ粉ガ飛ンテ壽命ガ短クナラヌヤウニスルタメニ硝子球内チ真空ニセズシテ高キ壓力ノ窒素ヲ入レ其壓力ニヨリテ高温ニ熱シテモ粉ガ飛バセヌ様ニシテ經濟的ニ強キ光ヲ出ス様ニシテアル電燈ガ出來タ之ヲ窒素電燈ト云フノデアル之ハ電力ノ割合ニ中々明ルイ電燈アル其他白熱燈ニテ「ネルニスト」電燈ト云フノモアルケレハ之ハ壽命ガ短イノト壞レ易イタメ餘リ用ヒラレヌカラ茲ニ話スコトヲ止メル

次ニ熱ニヨリテ振動セズシテ光ヲ發スル電燈即チ熱ヲ使ツモ其熱ハ唯中繼キノ役ヲスルノミニテ直接振動サシテ光ヲ出ス役ヲシテ居ナイ
電燈ニ付キテ述ベヨウ

炭ノ棒二本チ少シノ隔リテ置キテ向ヒ合セテ其一方ヨリ電流ヲ通スルト其間ニ火花ガ飛ンデ炭素ノ蒸氣ガ出來テ其蒸氣ガ火花ニヨリテ特殊ノ振動チナシ光ヲ出ス是ハ全ク熱ヲ使ハヌノデハナイケレハ熱ハ直接光ヲ出ス働キトハナラナイデ炭ノ蒸氣ヲ拵ヘル役ヲスルソシテ其炭素ノ蒸氣チ電氣デ振動セセルノデアル勿論此電燈デハ熱ニヨリ炭素ガ燃エルコトニヨツテモ光ヲ出スカラ全ク熱チシノ光デハナイ斯ウ云フ電燈チ孤光燈ト云ツテ活動寫眞チ映ス非探海燈又ハ瀛車電車ノ前ニツケテ強ク輝イテナル電燈等ハ此電燈チ使フ又前ノ様チ炭素棒二本チV字形ナル様ニ下部チ接近サセテ其中間ニ弗化「カルシウム」チ入レテ電氣ヲ通スルト弗化「カルシウム」ガ蒸發シテ其レガ電氣ノ爲メニ振動シテ橙黄色ノ美シキ「カルシウム」ノ色チ出ス之チ火焰孤光電燈ト云フ又炭素棒ノ代ハリニ銅棒チ用ヒ弗化「カルシウム」ノ代リニ「マグネタイト」(酸化鉄)ノ棒チ置キテ酸化鉄ノ蒸氣チ生セシメ之ニ電氣ヲ通スルノモアル之チ「マグネタイト」孤光電燈ト云フ又長キ硝子管ニ水銀チ入レテ之ニ電氣ヲ通シテ水銀ノ蒸氣チ作り之ニ放電シテ光ヲ出スノモアル之ヲ水銀電燈ト云フ是等ハ中々明ルイ電燈デアルガ光ノ色ガ太陽ノ光ノ色トハ同様デナイノデ普通使フニハ工合ガ悪イ又全ク熱ニヨラナイ電燈ガアル之ハ長キ真空ノ硝子管ノ内ニ少

量ノ空氣トカ炭酸瓦斯トカ窒素等ノ瓦斯ヲ入レテ氣壓ヲ〇、八ミリ位ニシテ管ノ兩端ニアル兩極ニ極メテ高壓ノ電流ヲ通スルト内ニアル瓦斯ヲ振動セシメ其瓦斯ニ特有ノ色ノ光ヲ出スモノデアアル之ヲ「フーア」ノ電管ト云フ而シテ熱ニヨリテ振動セシメ光ヲ出スモノハ勿論温度が高クナレバ光ハ強クナリ色ハ太陽ノ光ノ様ニ白色ニ近ツクモノデアアルガ熱ヲ唯中繼ニ使フモノハ温度が高クナリテモ光ハ強クハ益強クナルガ色合ト云フモノハ變ラナイノデアアル以上ハ今日迄使用セラレタ電燈ニ就テノ話デアアルガ此電燈カラ出ス光ハ電燈ヲ点火スニ使ハレタ總電力ノ唯一小部分ニヨリテ出テオトルノデ其大部分ハ暗熱トナツテ全ク光ノ用ヲナサズ無駄ニナツテ仕舞フノデアアル故ニ電燈ノ改良進歩ト云フコトハ此無駄ノ熱ニナル電力ヲ光ノ方ヘ向ケル様ニスルノデアアルソウスレバ益經濟的ニ光ヲ得ルト云フコトニナル即チ電燈ハ進歩スル譯デ唯明ルイハカリデハイカヌシテ其色合ハ成ル可ク太陽ノ光ノ色ト同様デナケレバナラヌ又使用ノ便利ト危險ノナイコトハ勿論電燈ノ價ノ安イコト及壽命ノ長イコトモ伴ハナケレバナラヌカラ一般ノ用ニ供スル電燈ノ改良ト云フコトモ中々六ヶ敷イコトトナルノデアアルガ今日使ツテ居ル「タンクス」電燈ニシテモ光ニ使ハレテ居ル電力ハ全電力ノ僅カニ百分ノ五、七位デアアツテ他ノ電力ハ實ニ全ク無駄ニナツテ居ルノデアアルコトヲ思ヘバ誠ニナサケナイ次第デアアル其無駄ニナルモノハ皆熱デアアルカラ成ル可ク此無駄ニナル熱ヲ取除クコトガ先ツ第一ノ急務デアアル熱ノ全ク伴ハナイ光ナレバ是程經濟ナモノハナイ譯デアアル併シ電燈モ最初白金時代ヨリ炭素時代ヲ經テ僅カ

ニ四五十年ノ間ニ今日ノ程度迄進歩シテ來テ居ル今後益進歩シテ消費セラル、電力ニ對シテモツト有効ナル光トナル部分ヲ多クスルコトニ務メネバナラヌノデアアル

◎吾が國東半島

習說校教諭 河野清實氏

半島は偉人を生ずると云ふことは諸君の已に御承知の事である云ふまでもなく山東半島は大儒孔子を出し徳干半島は大聖釋迦を出し小亞細亞の半島は大賢基督を出して居る。我國に於ても亦然りて源頼朝や北條時政は伊豆半島より起りて天下を討平し西郷隆盛、木戸孝允等は鹿兒嶋半島防長半島に起りて回天の大事業を成したのである。實際或る條件を備へたる半島は偉人の故郷であり活動の源泉地であり又安息所巢籠所起伏地である。余輩は斯かる感じの下に梅園祭に際して吾が光榮ある國東半島を説明して見たいと思ふのである上古の事は誠に不明であるが併し現存せる數百の古墳横穴墓に奈多龜山の古墳鹽屋松本の古墳乃至入津原金谷の古墳等によりて如何に古偉人の其實力が雄大で放膽であつたか云ふことが偲はれる。景行帝の西征の時國崎國造菟名手が先驅して土蜘蛛襲撃の大賊に向ひしが如き元正帝の朝、國東の健兒が宇佐神軍の先鋒をかつて日向大隅の隼人を討平したるが如きは其一斑をかつくに語るものと云ふべきであらう。中古主として平安朝之亦はつきり分らぬが現今に於て諸君の見られ

る富貴の大堂の如き古建造物天念寺や瑠璃光寺の古佛像より奈多の八幡宮や大嶽の六所神社の古神像によりて如何に當代の偉人が活躍に任じ豪放なる經營をやつて居つたかと云ふ事が分る。後冷泉天皇の御代紀季兼が半島的首腦となつてから其の一族が東に西に繁延して大勢力を構成した事は當時の記録文書遺蹟遺物の証明する所である。

降つて近古即ち鎌倉以後になると大分開明して來るのは愉快である鎌倉南北朝の頃までは紀氏の末流たる富來氏刺來野氏竹田津氏及び新來の田原氏等協同して弘安の役にも南北兩朝の争にも力を盡して居る殊に尊氏をして覇をなせしめ九州に於ける北境をして權威あらしめたのは殆ど富來忠茂田原直平等の力に因ること多きは二氏の文書の証明する所又學界の認むる所である。

更に進んで足利の末葉戰國の時代に入ると及んで半島男子の活動は實に目覺ましき限りであつた。田原氏と其支族吉弘氏は鞍掛沓掛安岐鶴川今市屋山等に本支城を築造して常に大内氏の豊後侵入を防ぎ特に田原親堅の如きは大内毛利の大軍を撃破し一躍豊前探題六萬石の領主となり門司城龍王城を築き遙かに中國勢を威赫し更に吉弘紹雲の如き遠く筑前筑後の野に轉戦して室満岩屋に本支城を築き吉弘宗茂の如き筑前の立花城に據つて肥筑の野を威壓するに至つた。此の時に於ける國東男子の活動は誠に空前のもので二豊二筑二肥より北は中國に東は海を越えて四國に及び到る處大内毛利小貳秋月等の兵を退け覇を北九州に稱へしは頻る痛快であつた。

世人大友當時の強を稱すれども實は田原吉弘二氏の活動で換言すれば半島男子の手腕に外ならぬのである。彼の吉弘宗茂（立花宗茂の事也）が李如松の大軍を碧蹄館に反撃せし快談扱ては吉弘嘉兵衛が孤軍黒田の大軍と戦ひて石垣原頭の露と消えし逸話の如きは遇々以て半島健兒が躍動の一閃光と見るべきである。

近世即ち徳川時代に至つては國東男も時勢の潮流には反抗が出来なかつた。然り赫々たる武勳を輝すべき時機と夫れ等の偉人を生ずる機會が無かつた。斯くの如くにして江戸三百年の太平を過すことかと思へば誠に遺憾であつたが併し諸君憂ふる勿れ末期に至つて三浦梅園赤松光映の二偉人が現はれた。

殊に梅園先生は學界に於ける又精神界に於ける革命の天使で平和時代に於ける武裝せる奮闘兒であつた。當時朱學以外は異學なりとて禁せられ洋學亦異端なりとて世に蛇蝎視せらるゝ世の中に於て禁令も壓迫も眼中に置かず斯く未開の學界に奮進せられ天晴豊后聖人否天下の大儒として其名千古に輝き遺訓昭々として萬世を照らすこととなつたのは誠に半島の誇りである。

國東の山嶽王兩子山は誠に半島男兒好箇の表象である。山容温乎、常に泰然として動かぬが併し其腹下には火氣焰々何時活動するが分らぬ半島男子亦斯の如く時機だに來らば其のエネルギーは隨所に於て活躍天に沖するのである。明治大正の偉人を以て任ずる諸君兩子山は祖先以來不斷の暗示を與へて居る。梅園先生は不磨の聖訓を垂れ給ふ。願くば之れを仰ぎ之に則り活動

を永遠に示視して吾が半嶋史の幾頁を飾り地下の古偉人をして微笑拍手せしめん事を誠に貧弱な説明でしたが之で失禮します。

◎【詩詠】

○梅園祭有感

蓬山一去幾星霜 梅苑大名四海香
祭祀季春三十日 廟碑經世八千康
遺墨披邊彩霞遠 庶羞陳處篆煙長
簾帷肅穆靈安在 但見仙壇琥珀光

立堂矢野文

○梅園祭之拙語

巍立梅園條理學
請看君子清香德

超然三語氣抽天
一百餘年薰四邊

上田完道

○梅園先生第三回の祭典に參拜せし所感

永松壯三郎

年ふれといよ句ひはかくはしと

千人もつごふ梅の下道

たくひなき學ひの海の底ふかき

君がこころを汲ひ人やたれ

いきて世にますと思へは君か友と

見まさむ人を造りてしかな

○同

矢野完四郎

水くきのあとにのこりて梅園の

花の匂ひろよゝにかされる

ろのかみの梅の香たごり里人は

ありけ誠の道にたわまず

○納税成績優良団体に對する表彰

表彰狀

西武藏村大字糸永

杉山組 三十二戸

共同克シ納税ノ義務ヲ竭シ明治四十四年度以降曾テ滞納者ヲ出サズ今後倍々戮力以テ此ノ美風ヲ助長スベシ茲ニ本村納税表彰規程ニヨリ別紙目錄ノ金員ヲ授與シ之ヲ旌表ス

大正六年五月十日

東國東郡西武藏村長 小野元次

表彰狀

西武藏村大字富清

中谷組 十六戸

緝陸相率ヒテ克ク納税ノ義務ヲ竭シ成績顯著ナリ自今協力倍々此美風ヲ持續スベシ茲ニ本村納税表彰規程ニヨリ別紙目錄ノ金員ヲ授與シ之ヲ表彰ス

大正六年五月十日

東國東郡西武藏村長 小野元次

○善行者に對する表彰狀

表彰狀

西武藏村大字両子三百七十四番地

秋吉伊作

嘉永元年八月十一日生

資性剛直敢テ諂諛セズ明治廿七年一月ヨリ西武藏村役場外勤使丁トナリ二十有四年間專ラ傳令ノ任ニ膺リ役場事務ヲ輔ケ就中國縣稅ノ如キ拾數年間滞納者ヲ出ササルガ如キ與ツテ力アリ勤績年數ノ長キニ伴ヒ諸般ノ事務ハ倍々複雑ナリト雖モ克ク規律ヲ守リ最敏活ニ處理シ曾テ倦怠ノ色ヲ見ハサズ夜々トシテ勉メ汲々トシテ怠ラズ洵ニ忠實衆庶ノ模範トスルニ足ル仍テ別紙目錄ノ金品ヲ贈リ其善行ヲ表彰ス

大正六年五月十日

東國東郡西武藏村長 小野元次

梅園會々則

第一條 本會ハ三浦梅園先生ノ遺徳ヲ私淑シ風俗人情ノ淳厚ヲ務メ處世ノ要訣志操ノ向上ヲ謀ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ梅園會ト稱シ事務所ヲ本村小學校ニ置ク

第三條 本會員ハ本村在住者ヲ以テ組織ス

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名 但西武藏村長トス

副會長一名 但西武藏尋常高等小學校長トス

理事三名 但會長ノ囑託トス

評議員若干名 但本村各區長ハ別ニ囑託セズ當然就任ノ事他ノ評議員ハ會長ノ囑託トス

第五條 會長ハ本會諸般ノ事務ヲ處理シ副會長ハ會長ヲ補佐シ理事評議員ハ會長ノ指揮ニ依リ

會務ヲ處理シ又評議ニ參與ス

第六條 本會ハ毎年四月三十日梅園祭並ニ講演會ヲ開ク

尚ホ時宜ニヨリ總會ヲ開クコトアルベシ

○現今役員左の如し

會長 小野元次 副會長 宮本金六 理事 矢野文也 栗林與兵 三浦末吉

評議員 小田原政尾 林壯三郎 秋吉波治 田上淺五郎 野田信彦 友成伊勢松 三浦壯

上原安五郎 小野猪次郎 岩丸平作 溝部松治 友弘清太郎 淵上勝太郎 猫橋五六

矢野完四郎 古庄甚策 川野與作 種田浦吉 以上

大正六年七月二十日印刷
大正六年七月二十五日發行
(非賣品)

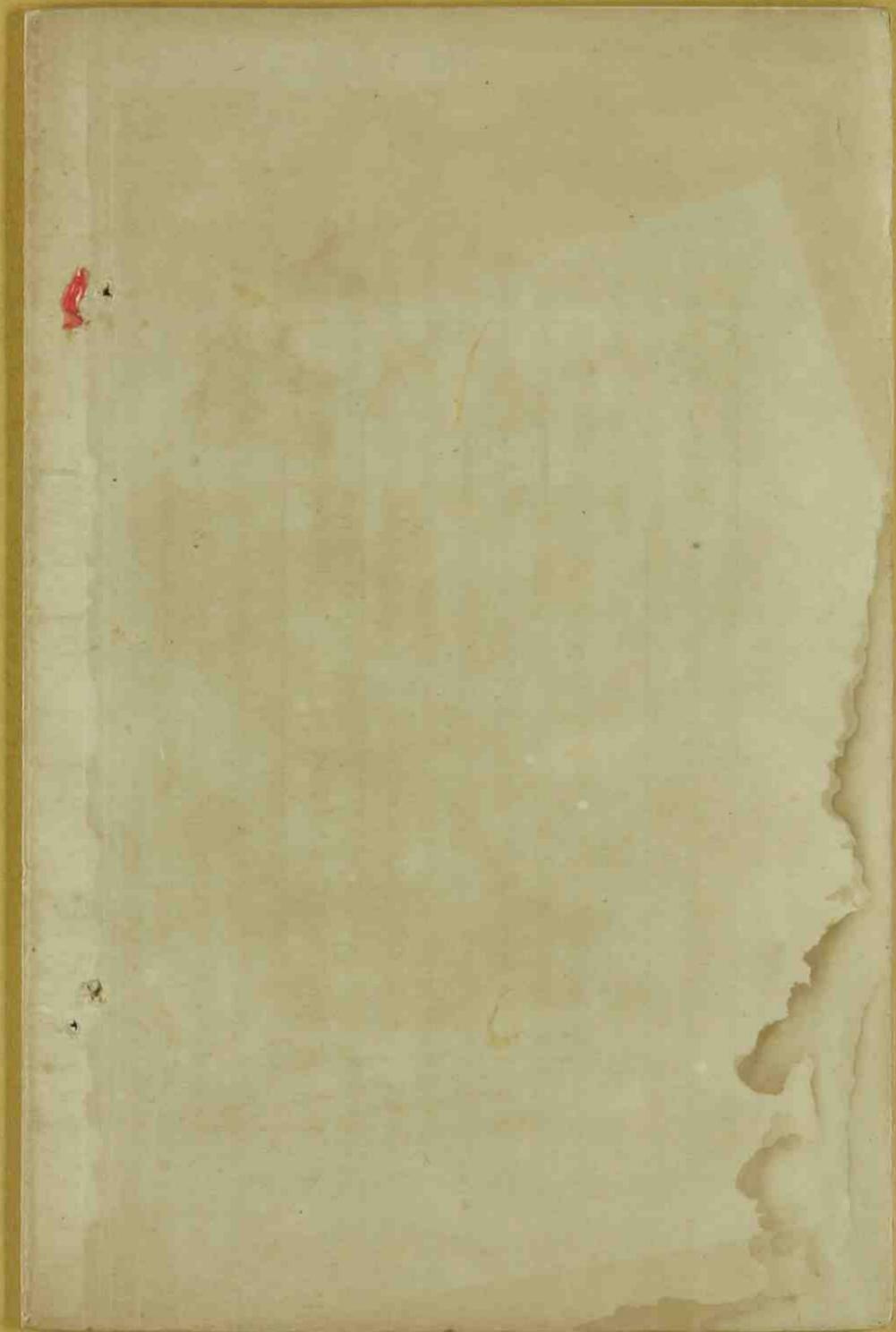


編纂兼 發行所 梅園頌德講演會
大分縣東國東郡西武藏村

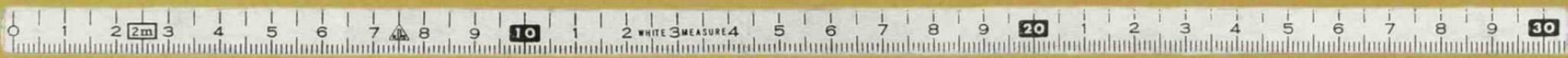
發行所 西武藏尋常高等小學校
大分縣東國東郡西武藏村

印刷者 伊藤福重
大分縣東國東郡東町

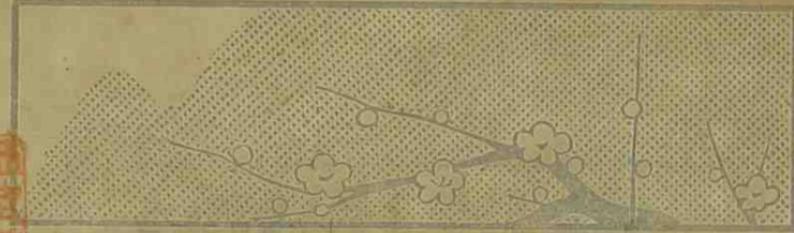
印刷所 大正社
大分縣東國東郡東町



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵



大正七年六月二十五日發行

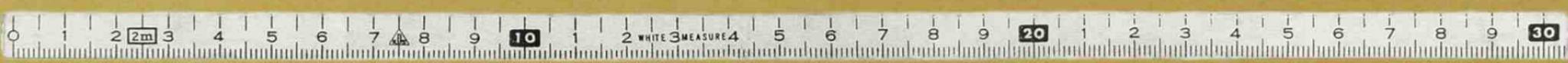


梅乃可新里

武藤文庫所蔵
長崎大学附属図書館
印



臨時號
梅園頌德演講會



第四回梅園祭並講演會目次

一、梅園祭並講演會趣旨	一頁
二、梅園祭式順序	二頁
三、表彰式順序	三頁
四、齋主祭文	五頁
五、委員長祭文	六頁
六、來賓祭詞	六頁
七、講演	八頁
(一) 農村改良の根底	若島實業學校長 八頁
(二) 梅園先生を懐ふ	前田大分新聞主筆 十頁
(三) 不斷の努力	柴山梓葉中學校長 十三頁
(四) 梅園先生の訓へを讀んで感じたこと	生田師範學校主事 十四頁
(五) 神といふこと	糸未大分皇典講究分所長 十七頁
八、寄稿	十八頁
(一) 自慢の種のよしあし	古庄福岡修獻館教諭 十八頁
(二) 三浦梅園の嘉趣	武藤第七高等學校教授 二十一頁
(三) 三浦梅園と帆足萬里	全氏(述) 二十二頁
九、表彰文	二十五頁

梅園祭頌德講演會趣旨

三浦梅園先生ハ不世出ノ鴻儒ニシテ歿後百二十餘年ノ今日其學德益々光輝ヲ放チ明治四十三年本郡教育會ハ頌德會及ヒ墓前祭ヲ舉行シ同四十五年二月二十六日贈位ノ恩典アリ教育會亦本村民ト共ニ頌德碑ヲ建設ス梅園集全ノ發刊梅園文庫ノ設立皆先生ノ懿德ヲ欽慕スルノ衷情ニ出デ遠近都鄙先生ヲ謳歌セサルモノナキニ至ル斯村ニ斯人アリ實ニ村民榮譽トスル所ナリ是ニ於テ乎大正四年二月二十四日本村會ハ滿場一致ヲ以テ毎年四月三十日(先生易實日)全村民及學校ノ業ヲ休ミ知名ノ士ヲ聘シ學校ニ於テ頌德講演會ヲ開キ梅園祭ヲ舉行センコトヲ決議ス是レ村民及子弟ヲシテ永ク先生ノ德澤ニ浴スルノ恩惠ヲ忘レザルト與ニ風俗人情ノ淳厚ヲ務メ處世ノ要訣志操ノ向上ヲ謀ラント欲スルニアリ

大正四年三月

第四回梅園祭並講演會概況
梅園祭式順序

(大正七年四月三十日)

午前十時一同着席

次 委員長ノ先導ニ依リ齋主來賓着席

次 一同敬禮(風琴調節)

次 委員長開式ノ辭

次 修葺

次 神職招魂詞(此間一同敬禮)

次 獻饌(此間奏樂)

次 齋主祭文ヲ奏シ玉串拜禮

次 委員長祭文 玉串拜禮

次 來賓祭詞 玉串拜禮

次 後繼者玉串拜禮

次 一同拜禮

次 頌徳唱歌

次 撤饌(此間奏樂)

次 神職還魂詞(此間一同敬禮)

次 委員長閉式ノ辭

次 一同敬禮(風琴調節)

次 齋主以下一同退場

右畢ツテ引續キ墓前參拜ヲナス

表彰式順序

午後一時一同着席

一、一同敬禮

二、開式ノ辭

三、君ガ代合唱二回

四、戊申證書奉讀

五、奉答唱歌合唱

六、稅務監督局表彰狀傳達(本村ニ對シ)

七、納稅優良部落表彰

八、日出稅務署長訓辭

九、村長式辭

一〇、來賓祝辭

一一、受賞部落總代答辭

一二、閉式ノ辭

一三、一同敬禮

右畢ツテ講演會開會

附記。來賓並參列者

岡本郡長 柴山杵築中學校長 生田師範學校主筆 前田大分新聞主筆 若島實業學校長
糸永皇典講究分所長 福田郡視學 日出稅務署長 三浦留七氏 藤原朝來村長 小川安
岐校長 田邊武藏校長 渡邊楓江校長 白石大内校長 濱崎朝來校長
西武藏朝來學校職員兒童並ニ村内一般人士

◎祭文

此れの神籬に招き奉り坐せ奉る故從四位梅園三浦翁の靈前に齋主糸永茂昌謹みて白さく汝翁は
世に雙無き物知人に坐しけるか此の里に生れ出しは此の里の此上無き幸になも有りける故先に
此の郡の教育會人等思ひ起して奥都城に御祭仕へ奉りて御功德を歎び奉り仰ぎ奉り譽め奉り稱
へ奉りければ翁の美名は日刺方の雲居の上に聞へ上りて畏き邊より從四位てふ高き位を贈り給
はりさ然れば又會員等は記念頌德碑を建て梅園文庫を設けて翁の學の力の廣く多かりし事を世
に普く知ら令めければ翁を仰ぎ奉り稱へ奉り慕ひ奉り譽め奉る者彌々益々員多く成りにたり如
此て此の里人等相謀りて翁の身亡せ坐しぬる四月三十日に年々御祭仕へ奉り居りしが今茲大正
七年は翁の身亡せ坐しより百卅年に當れば玉の小琴の珠に嚴めしく美はしく御祭仕へ奉るとし
て里人は更にも云はず縣内にて學の道に名立たる人々等を召し集へたれば各々も御前に參出來
て禮代の御食御酒魚菜種々の物を奉出して次々に拜がみ奉り禮ひ奉りつゝ翁の御功德を頌め奉
り稱へ奉る狀を平げく安げく聞こし食せと白す
如此仕へ奉るに依りて今し世の開け行に隨人の心は薄く行は弱く成り行かむとするを翁が顯世
に御坐しし時身を以て人を善き方に導け給ひし事の如く酔く厚く成り行く可く御靈乍らに守り
給ひ幸へ給はへご齊主茂昌山菅の根の懇に乞ひ禱儀奉らくと白す

祭文

維時大正七年四月三十日西武藏村長小野元次清酌庶羞ノ奠ヲ以テ贈從四位三浦梅園先生ノ靈ヲ祭ル
願フニ先生夙ニ天地ヲ洞覽シ鬼神ヲ殫極シ德一世ニ高ク識古今ニ踰ユ以テ後世ノ範トスヘシ抑モ報本反始ハ人倫ノ大本ニシテ吾人此ノ村ニ在リ益々其發展ヲ將來ニ期セントスルモノ焉其源ヲ忘ル、ヲ得シヤ曩年村會ノ決議ヲ以テ祭日ヲ定メ恭ク報德ノ誠ヲ効ス一ハ以テ先生教化ノ恩ニ報ヒ一ハ以テ世道人心ノ作振ニ資セントスルモノアリ茲ニ百三十年記念祭ヲ行フニ方リ燕辭ヲ陳シ微忱ヲ表ス尙クハ饗ケヨ

大正七年四月三十日

西武藏村長 小野元次

祭詞

維時大正七年四月三十日謹ミテ梅園三浦先生ノ靈前ニ白ス
伏シテ惟ルニ先生夙ニ深ク天地自然ノ玄理ヲ究メ德並ヒ高ク學界ニ貢獻シ世道人心ヲ教化スル甚ダ大ナルモノアリ易簧セラレテ茲ニ百三十年學德嘒々山ト共ニ高ク深淵タル學溪ノ水ト共ニ長ヘニ流ル往年贈位ノ恩命ヲ拜シ靈光ノ徹スル所下泉壤ヲ照ス豈偶然ナランヤ曩ニ本郡教育會頌德會ヲ起シ頌德碑ヲ建テ或ハ梅園文庫ヲ設ケ或ハ梅園全集ヲ發刊シテ遺德ヲ千載ニ傳

ヘンコトヲ期シ本村亦本月日ヲトシテ年々歳々梅園祭ヲ行ヒ老モ若キモ相集ヒテ追敬ノ誠ヲ輸ス嗚呼世ノ美譽ナリト雖蓋所以ナキニアラザルナリ不肖偶々任ニ此ノ地ニ在リ今茲ニ百三十年祭ノ盛典ニ列スルコトヲ得轉タ先生ノ學德ヲ景仰シ感慨更ニ切ナルモノアリ敢テ燕辭ヲ陳ス尙クハ之ヲ照鑒セヨ

大正七年四月三十日

大分縣東國東郡東部長 從七位 岡本保三

祭詞

時維大正七年四月三十日茲ニ謹ミテ清酌奏盛ヲ具ヘテ梅園三浦先生ノ靈ヲ祭ル
願フニ先生幼ニシテ穎敏夙ニ思テ天地ニ造化ノ理ニ潛メ俛焉刻厲殆ンド寢食ヲ忘レ終ニ一家ノ新學說ヲ唱道スルニ至ル又能ク時弊ヲ矯メテ忠孝ノ大義ヲ明ニシ以テ人心ノ歸趨ヲ示セリ其造詣ノ深遠ナル其ノ識見ノ卓越ナル誠コ一代ノ先覺者トイフベシ爾來南豐ノ地碩學宏才ノ士輩出シ盛名ヲ天下ニ馳スルモノ多キハ主トシテ先生ノ遺澤ニヨラズンバアラズ然ラバ先生ハ死スト雖尙生ケリトイフベキカ余本日墓門ニ拜シ其高風ヲ欽シテ止能ハザルモノアリ恭シク微忱ヲ展ブ尙クハ饗ケヨ

大正七年四月三十日



【文責通記者にあり】

● 農村改良の根底

若島郡立實業學校長

今日は園梅先生の百三十年祭で何か話せよの仰せ、自分は先生の御名を始めて知つたので先生の御徳を稱へることは出来ませぬ。
問題は大きいけれども要するに地方の百姓を如何にせば今後善くなるか其根本はどこにあるかそれは農村の改良である、園梅先生は百三十年の昔に於て當村の根底を築かれた現在の諸君は數百年の後に於ける理想に近い根底を造らねばならぬ、園梅先生は地方の改善を計つたのである之に因りてもいづらか意味がある。

近來地方改良農村改良等が互らひ人の間に論せられてゐるが農業を主として立てる町村は如何に改良すべきや出發点を何處に置くか、其主業を發達せしむれば自然に地方を改良することが出来る、そして地方の主たる職業は農業である。
農法を改良して經濟状態を改良して懐具合をよくすることを叫ばねばならぬ。

第一収入を多くすること。それには即ち田畑山林よりすべてに於て良質のものを多く收穫し高く賣りて廉い物を買ふことが切要である、それには地面を廣くすること即ち開墾すること外國の地面を取入ることなれど外國の地面を得るは容易ならず依て内地開墾をせざるべからず未だ内地にても精細に調査すれば開墾の餘地あり次に方法を講ずるに栽培法を従前より改良し肥料の施用を改める如きです而して良き物を得るには善き種子を選ばねばならぬ良質の物を多く得且つ高く賣るには共同して購買によれば割合に安價の品物を求むることが出来る。かくの如き方法あるも之を實行し得ないのは百姓共の無慾である無考である時に行ふものもあるも些少なる利害のために大なる損失をしてゐる。故に現在の方法を改良するには先づ人を作らねばならぬ凡ての仕事は人が本になるのである即ち多くとり入れるのも良いものを得るのも皆人が根底である百三十年の昔に園梅先生が教へたことが西武藏の現在に實が結ばれたわけである故に百姓も根底は人を作らねばならぬ人を作るには云までもなく教育をせねばならぬ。所が近來農業にて教育せられる子供は方法を誤まつてゐるために祖先傳來の農業を思む傾向となつてゐるが或程度までは親に世話をやかせがよいさうすればだん／＼と親も考へることになるであらふ社會は多くの階級があつてその階級に適する教育をすることが大切である全し農業者でも種々の階級者があるから其の階級に應じた教育をせなければならぬ近來往々耳にするのは農業には學問がいらないと類にいってゐるが之が農業の發達しをい源因である、農業は産業や學問を

利用することが最もかけてある世の中の進歩と共に人も進歩せねばならぬ然るに農業は進まな
いでよいといふことはない、時代と共に進歩せねばならぬ農業を改良發達するには子弟を教育
する事が即ち根底である、この方面の才識を有する人が多くなれば漸次農業が發達する徒に農
業技術員指揮を仰がずでもよい要するに農村の改良は子弟の教育にあることに着眼せられんこ
ことを願ふ。將來に着眼せられて事のよるしきを取り各々其の財を増さんことを希望します。

梅園先 先を懷ふ

大分新聞主筆 前田 多三郎氏

諸君本日三浦梅園先百三十年祭を行ふに當り私に參列の榮を願たれましたのは深く謝する次
第であります従つて先生の遺徳追慕の爲め聊なりとも纏つた御話を致したい心算でありました
が出發前新納氏一行に陪して臼杵の石佛を觀に行つた爲下調べを解り別に順序の立つた御話は
出來ませぬ唯だ思ひ附に依て私の感じた点を述べるに止めます此處には三浦先生の御肖像が揚
げてある様に見受けましたが私は是を拜見して先づ先生の頭腦の偉大なることに感服しました
杉大なる梅園全集二巻は實に先生の頭腦から流れ出た産物であります同じ人間の頭腦ながら斯
くも思想の豊富なものかと思ひますれば一入感嘆に堪へぬ次第でありますして先生は博學洽
聞、其の著はされた書物は哲學を宗として倫理、道徳、政治、經濟より天文算數に及び而も夫

が先生獨特の見地に立つて産れたのであるから更に崇いのであります即ち先生の學は全く獨創
に成るもので師授に基いたものではない無論少壯の際章句文字を授かつたお師匠さんはあるに
相違ないが先生の宇宙人生に對する大思想何人から承けたものではないのである併しながら
先生は決して妄斷家ではありませんせぬ先生の著はされたを語の例旨と云ふのを讀て見ますと「凡
て人の天地の事物に對するには決して窺察を容さぬ」と書かれてある窺察と云ふのは獨斷的に
憶測を下すことである苟くも疑ひがあれば飽まで天地道理に依つて解決をしなければならぬこ
言はれて居る支那の陰陽家などは斯かる點に着眼することが出來ず勝手に天地の皮相に就て窺
察即ち獨斷を下したものであるから陰陽五行の説と云ふ様な滑稽なものが出來たのである先生
は是に反して何でも實際に驗べた上天地間の道理に憑へて解決されたのである先生が天地生成
の起原を論せらるゝ邊りては西洋諸學者の専ら論ずる星雲假想説に頗る省た處がある様である
而して見ると先生の哲學は科學に立脚して築き上げられた所謂實驗哲學で彼の専ら思索考察の
餘に成つた東洋哲學と大いに趣きを異にして居る即ち主觀的哲學でなく客觀的哲學である或は
全然客觀的だとは云へぬかも知ませぬが先生研究の根底は全く客觀的である少し御話が六ヶし
くなる様だが私の考へでは凡ての學術は先づ科學に出發しなければならぬと思ひます科學即ち
實驗に根底を置かぬ學問は其の基礎が甚だ薄弱で早晚顛覆を免れぬだらうと思ひます無論哲學
が形而上の學である以上全然思索考察を無用視する譯には行きませぬ併し科學を棄てて専ら思

索考察に溯へる様なれば或はまぐれ中りに中ることはあつても先づ、趨勢を觀ても凡ての學は先づ科學に立脚すべしと云ふ風になつて居る無論科學萬能を主張するのではないが、而るに先生が百數十年の往昔にあつて斯る卓見の下に其哲學研究を進められたことは寧ろ一種の奇蹟と謂はざるを得ませぬ此の點は特に私の先生に敬服する所であります先生の誕生された享保八年は八代將軍吉宗の治世で徳川時代に於て最も文運の隆興した時である而も天下の學者として物徂徠を始め伊東東涯大宰春台等活躍した時である其の宗とする所は朱子學に非ざれば則ち復古學若は清朝の考證學等に設頭して天下の學者皆傳習的漢學の權威服る外には全く考のなかつた當時に於て先生獨り卓として時流の外に超越し哲學研究に一身を捧げ而も思索考察の弊に墮せず客觀的哲學の爲め萬丈の篋を吐かれた事は是亦一奇蹟とせざるを得ぬ、鎮西の一布衣三浦晋が日本に於ける客觀的哲學の唱首たることは實に吾々の誇とする所であります而して先生の學が全く獨創の見に出で而も西洋哲學と軌を一にすることは私の愈々驚嘆して已まない所である勿論當時蘭學は吾が日本に傳はつて居た先生の歸山録中には蘭語のアルハベットの事を書かれてある併し夫に依て見ると先生は深く蘭語を學ばれた様にもない且つ彼の松田玄白等が當時蘭語の解剖書「ナトミカ」を譯するに名狀す可らざる苦心を費して居る處を見るに原書に依て彼の思想を窺ふことは絶対に不可能であつたに相違ない従つて先生の學は蘭語に假る所なきは無論全く獨創の見に出ずる事を斷言して憚らないのである是に至るに愈々先生の頭腦の偉大なることに驚嘆するのであります洵に取り止もないことを申上げて諸君の清聽を瀆したることは偏に御勘辨を願ひます

不斷の努力

不斷の努力

柴山杵築中學校長

不斷とはいつてもいつでもたえず朝から晩まで生れてから死ぬるまで常に／＼と云ふ事で人間はこの不斷の仕事せなければならぬのである私は之に就いて生きたる修身材料を得ました先々月十五日私の學校の寄宿舎の焼た事である日頃は注意はしてゐましたが遂に失態を演じました之が原因に就て調べてみました更に／＼分りませんして見れば私共の手落であつた事を深く反省いたしてゐます火の出し入れには火をおとす事がありますが夫は全部火災は起さない而しながら一度あやまれば一大事件を惹起するに至るので素はわづか事だが大變な事に立ち至るのであります故に絶えず不斷の注意をせなければなりません今日納税完納十箇年間繼續で表彰されたといふ事は大に敬意を表する次第である若し來年動まらねば水泡に歸するのである故に將來も十分注意して不斷の注意不斷の努力を願はう次第である世の成功者は不斷の努力をもたれてゐた尋三卷六の讀本に木下藤吉郎の事が二課丈ぬいて書かれてあるこれには藤吉郎の人の知らぬ用意周到が彼の成功をいたしたと云ふになるのである藤原氏の權力をおさへんとされた後三條天皇が關白頼光の子師實の養女藤子を東宮白皇天皇へ入れられたのは師實が六箇